閑院庭園の意匠と利用に関する研究—閑院をめぐる漢詩から—

A Study on the Design and Utilization of Kan'in Mansion Garden —Through the Chinese poems written about Kan'in Mansion—

廣安 春華

Haruka Hiroyasu

京都大学大学院 人間・環境学研究科

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

Key Words : 1.閑院 2.漢詩 3.遊興

1.Kan'in mansion 2.Chinese Poems 3.amusements

摘要

平安時代初期に造営された藤原冬嗣の邸宅・閑院は創建当時の姿について不明な点が多い。本研究では、閑院への行幸や餞別の宴の際に詠まれた漢詩を庭園史の観点から整理・分析し、庭園意匠と利用目的を考察した。

漢詩には、釣・弾琴・喫茶・詩作などの遊興の様子やそれらに用いる釣殿・薬室(茶室)・花亭といった庭園内の施設が詠まれており、遊興面に配慮した邸宅だったことが明らかになった。閑院は臣下の邸宅であるが故に接遇面に配慮されていたことがうかがえる。また、行幸については、冬嗣と家人に対する叙任等が目的であり、詩宴も天皇と臣下の親密さを確認する目的のもの(密宴)であったと推測できる。

Abstract

Kan'in mansion was established by Fujiwara no Fuyutsugu in the early Heian period, but there are still many things unknown about the mansion at that time. The purpose of this study is to reveal the design and function of its garden from the standpoint of garden history by collecting and analyzing Chinese poems about the mansion written in the Emperor's attendances and private farewell parties.

In the Chinese poems were mentioned not only the different amusements like fishing, playing the *koto* (zither-like Japanese musical instrument), having tea

and making poems, but also facilities in the garden such as a fishing pavilion, a tea house and a flower-viewing arbor. That reveals the fact that Kan'in mansion was a place sufficiently prepared for pleasures in the garden and suggests that the hospitality for the Emperor was fully considered because it was an aristocratic mansion. The Emperor's attendance was for the investiture of Fujiwara no Fuyutsugu and his wife, so it is possible to think that the private poem-making party was held in order to tighten the intimate relationship among them.

1 はじめに

拙稿「冷然院庭園の意匠と利用に関する研究—冷然院をめぐる漢詩から—」では、平安時代初期、特に嵯峨朝(809~823)の邸宅・離宮に設えられた庭園の形態と機能を探る目的で、その当時造営された離宮のひとつである「冷然院」についての考察を、漢詩を通じて行った。しかし、嵯峨朝の庭園の実態にさらに迫るためには、より多くの事例について整理する必要がある。嵯峨朝では、嵯峨天皇の弟・淳和皇太弟の南池(淳和院)や藤原冬嗣の邸宅である閑院にも行幸があった。その際に、天皇の離宮(冷然院など)と同様に庭園に関する漢詩が詠まれている。当時の行幸では、邸宅の庭園や周辺景観について、天皇と臣下が詩歌を詠み交わし(君臣唱和)、互いの関係性

を補完すること（君臣和楽）を実現しており、庭園はそれを行う重要な場となっていた。そのため、漢詩は庭園について知る上で重要なツールとなり得る。こうしたことから、本稿では「閑院」の行幸等に目し、臣下の邸宅における庭園の形態的・機能的特性とはどういったものだったのか、漢詩の分析をもとにその一端を明らかにしてみたい。なお、漢詩は内容を十分に検討した上で使用するものとする。

研究の方法としては、平安時代初期に編纂された『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』などから、閑院庭園を詠んだ漢詩を抽出し、整理・分析する。そして、その結果に依拠して、平安時代初期の当庭園の姿を明らかにする。

2 閑院に関する先行研究

閑院に関する先行研究としては、管見の限り、以下の研究がある。まず、太田静六による建築史からの研究¹。そして、野口孝子の歴史学からの研究²。さらに飛田範夫の造園史からの研究³、蘇明名の文学からの研究⁴がある。また、茶の観点からの研究として村井康彦、小川後楽のものが挙げられる。

太田は閑院を〔第1期〕平安時代初期から盛期、〔第2期〕平安時代末期、〔第3期〕平安時代末期から鎌倉時代初期の3期に区分し、考察した。閑院は、創建された平安時代初期から鎌倉時代に至るまで長期に渡って栄えた貴重な邸宅で、著名な邸宅といえば皇室関係のものが大半であった平安時代初期において、臣下の邸宅中、その随一として挙げられるほど優れたものだったことを指摘した⁵。『凌雲集』に収められた御製（嵯峨天皇の）〈夏日左將軍藤原冬嗣閑居院〉から、太田は初期閑院の院内の様子について次のように述べる。「池岸は曲折して変妙を極め、夏なお寒さを覚える清泉が湧くなど、猛暑を避けるには絶好の場所であった。…池亭が釣殿であることが解るし、庭内から清泉が湧いていたことも知られる。」

続く第2期、特に堀河天皇時代の閑院について復原図（図1）を示している。この時期の閑院は専ら藤原氏の邸宅という訳ではなく、むしろ天皇や上皇との関係が密接になる。例えば、嘉保2年（1095）に改築された閑院は、当初から白河上皇の「後院」として造営され、庭園意匠も非常に華美なものだった⁶。太田は、舟遊びを楽し

図1 堀河天皇里内裏時代の閑院第推定復原図
（太田、『寝殿造の研究』、1987より）

むことができる広い鳳池とそこに大きな中島が存在したこと、釣殿が中島や鳳池を眺めることができる絶好の場所にあったことを指摘した。なお、第3期の閑院については本論の対象範囲ではないので省略する。

野口は、太田の研究ならびに飯淵康一の研究⁹を下敷きにしながら、里内裏として機能するようになった後の閑院について、火災を契機として第1期～第3期¹⁰に分け、第1期では諸門とその機能についての考察、第3期では『吾妻鏡』の記事から領域の確定を行った。閑院の敷地について、太田は初期閑院から焼亡するまで一貫して南北二町とし、飯淵は藤原基房が新造した以後は一町としたが、野口は第3期の閑院が、一町よりも南北に八丈分広がったことを指摘している。

飛田は、まず閑院の位置および規模について『拾芥抄（中）』に「二条南西洞院西一町」と記載されていることから敷地は一町である、とした。また、植栽に関しては『文華秀麗集』収録の淳和皇太弟の漢詩〈夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字応製一首〉にタケ、ノイバラ、マツ、アオギリが詠まれていて、タケは水辺に植栽され、マツやアオギリはかなりの大きさであった、とする。また、閑院で特徴的なのはアオギリで、すでに『出雲国風土記』や『万葉集』に例があり、平安時代初期においても、中国伝来の樹木として親しまれていたのではないかと指摘する。さらに、『凌雲集』の〈夏日左大將軍藤原冬嗣閑居院〉から、園池の岸にシダレヤナギやマツが存在していたことを明らかにした。

蘇は、平安時代初期の喫茶についての記載がある漢詩を抽出し、それらを詳細に考察している。当時の喫茶趣味や平安貴族の茶にまつわる漢詩が唐の茶詩から、修辭的な部分で大きな影響を受けたことを明らかにした。また、留学僧を含む遣唐使によって日本にもたらされた茶は、精神的価値を持つ飲み物として平安人の心を捉え、唐風の喫茶趣味の代わりに日本的な喫茶の世界が次第に展開していく様子を明らかにした。

村井は、弘仁期の茶趣を述べる上で、閑院の漢詩をとりあげている。茶が日本の宮廷貴族の間に広まったのは空海ら入唐帰朝僧の役割が大きく、嵯峨朝の詩趣をもたらしたものこそ「茶」であると指摘している。また、弘仁期には、「茶」が音楽とともに幽興の世界をかもし出し、詩趣を盛り上げる不可欠な要素となっていたことも合わせ述べている。

小川は、平安時代の茶について、茶に関する記録・茶を詠んだ漢詩（閑院のものも含む）を分析した。平安時代、特に嵯峨朝において喫茶が流行した背景には、当時の為政者らが「茶」のもつ隠棲的・脱俗的雰囲気的心情的に共感する部分が大きかったこと。また、貴族や僧侶らにとって、「茶」が人間関係のパイプ役となっていたことを指摘している。

以上のように、初期閑院は遺構の検出例がなく、記録も少ないため、先行研究には漢詩を史料としたものも多い。しかし、その多くが一部の漢詩をとりあげたものである。そこで、本研究では、嵯峨朝を中心とした平安時代初期の閑院に関連する漢詩を全て抽出・検討し、初期閑院の利用や意匠についてより詳しくみていきたい。

3 閑院の立地と記録

(1) 閑院の立地

閑院は、平安時代初期に藤原冬嗣（775～827）が創建した邸宅である。現在の京都市中京区小川通二条下ル古城町西福寺内に当たる。しかし、平安時代初期の閑院の領域に関しては、先行研究の紹介にもみられるように議論の余地がある。初期の閑院の領域については太田の二町（十五・十六町）という見解、あるいは飛田の『拾芥抄（中）』に依拠した「二条南、西洞院西一町」（十六町）という見解がある¹¹。

一帯の発掘調査の履歴を見ると、立会調査が1982年

図2 閑院の位置（□）

（本地図は「国土交通省 国土地理院 数値地図 25000（地図画像）」から作成したものである。）

と1987年に行われているが、平安時代初期の遺構は検出されず、初期の閑院についての手掛かりは得られていない。なお、当初から二町を占める邸宅の場合、本来であればその二町を隔てる道路の側溝がないのが普通である。ここでは、十五・十六町間の道路の側溝については検出には至っていないものの、存在しなかったことを断言できる状況にはない。

(2) 閑院の記録

閑院に関する記録は、平安時代中期以降には多くみられるが、平安時代初期に関しては以下に示す2例の記録のみである。

①弘仁5年（814）4月乙巳（28日）条

「乙巳。左近衛大將正四位下藤原朝臣冬嗣の閑院に幸す。供張の宜しきこと、甚だ雅致有り。天皇翰を染め、群臣詩を獻ず。時人以て嘉會と為す。冬嗣に従三位、无位の藤原美都子に従五位下を授く。五位以上に衣被を賜ふ¹²。」（『日本後紀』¹³）

②弘仁12年（821）9月乙亥（6日）条

「乙亥。右大臣の閑院に幸す。文人に命じて詩を賦せしむ¹⁴。」（『日本後紀』）

①では正四位であった藤原冬嗣が従三位へと、无位であった妻である藤原美都子が従五位下へと昇進し、その叙任式と宴のために天皇が閑院を訪れたことを示す。また、②は閑院に行幸し詩会を催したことを示す。

滝川幸二は平安時代の詩宴を「公宴」と「密宴」に区分し、公宴は主に年中行事での詩作で、応製詩（天皇の命令による詩作を行う場合）が中心となり、密宴は天皇の私的興趣により催され、奉和詩（天皇が詩を詠み、それに対して臣下が応える場合）が中心であるとした¹⁵。さらに、弘仁 5～6 年辺りまでは公宴が中心に行われたが、それ以後は密宴が目立つことも指摘している。上記の 2 例の記録を見ると、「侍宴」¹⁶と記されていないので、これらは天皇が私的に行った「密宴」であると考えられる。さらに、鈴木景二は、天皇が律令制の貫徹する宮から出離して臣下の邸第へ行幸すること自体が、宮内ではなしえないと思われる人格的結合関係を補完する役割を担ったとした¹⁷。つまり、2 度の閑院行幸は嵯峨天皇が藤原冬嗣との関係をより堅固なものにするという狙いをもった私的な行幸だと考えられるのである。

4 閑院に関する漢詩

嵯峨朝において閑院が詠まれた漢詩は、表 1 のように全部で 6 首ある。そのうち 3 首（作品番号 1～3）は同じ行幸の際に詠まれた漢詩で、嵯峨天皇が漢詩を詠み、淳和皇太弟と滋野貞主がそれに応じて詩を賦したものである。作品番号 4 は、藤原冬嗣が閑院にて藤原吉野と甲斐の判官・藤原某に送った漢詩に、巨勢識人が和したものである。作品番号 5 は、作品番号 4 と同じ宴で淳和皇太

弟が詠んだものである。作品番号 6 は閑院にヤナギを移植した出来事について滋野貞主が詠んだ漢詩である。以上、6 首について作品番号 1 から順番に漢詩に描かれた閑院庭園の意匠や景観の要素を抽出し、整理・考察していきたい。

以下、表 1 で示した作品の原文、読み下し文を示し、続き大意¹⁸と若干の説明・解釈をそれぞれ示す。

(1) 作品番号 1

「夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字。應製。一首。」
淳和皇太弟

【原文】

此院由来人事少

況乎水竹毎成閑

送春薔薇珊瑚色

迎夏巖苔玳瑁斑

避暑追風長松下

提琴搗茗老梧間

知貪鸞駕忘囂處

日落西山不解還

【読み下し文】

此の院由 来人事少なり

況むや水竹毎に閑を成すをや

春を送る 薔 薇 珊瑚の色

夏を迎ふる巖 苔 玳瑁の斑

景を避けて風を追う長松の下

琴を提げて茗を搗く老梧の間

知りぬ鸞駕囂を忘る處を貪りたまふことを

日は西山に落つるも還らむことを解らず

【大意】

閑院は世間との交渉が少なく、池際に植栽されたタケが閑静な趣を醸し出している。春が去り、イバラの棘は赤く、夏を迎える巖のコケはウミガメの甲羅のように斑になっている。暑い日差しを避けて、風が通る大きいマツの下に行き、アオギリの間で琴を提げて、茶の芽を搗く。閑静な院で充分に楽しむことを知り、日が落ちたのにも気づかない。

作品番号 1～3 までは、同じ行幸において詠まれた漢詩である。題詞に「夏日・・・」とあるように、夏のある日に閑院を訪れたことが分かる。記録と対照すると、先に示した①弘仁 5 年 4 月乙巳（28 日）に当たる可能性が大きい。正四位下の藤原冬嗣に従三位を授ける目的で行われた行幸で、「・・・天皇翰を染め、群臣詩を獻ず。」とあるように、嵯峨天皇が染翰した御製に群臣が詩を献じた様子が分かる。ちょうど春が去り、夏が始まった微

表 1 閑院に関連する漢詩一覧

番号	上段：題目 下段：作者、典拠
1	夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字。應製。一首。 淳和皇太弟 『文華秀麗集』
2	夏日左大將軍藤原冬嗣閑居院 嵯峨天皇 『凌雲集』
3	夏日倍幸左大將藤原冬嗣閑居院、應製 滋野貞主 『凌雲集』
4	敬和左神策大將軍春日閑院餞美州藤大守甲州藤判官之作。一首。 巨勢識人 『文華秀麗集』
5	餞美州掾藤吉野。得花字。一首。 淳和皇太弟 『文華秀麗集』
6	五言遥和播州長史丹治中得絮柳請植左大將軍閑院之作 滋野貞主 『経国集』

表2 作品番号1に含まれる庭園に関する事柄

題目	夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。採得_閑字_。応製。一首。		
著者	淳和皇太弟		
時期	夏（弘仁5.4.28 か）		
時間	日中		
漢詩に詠まれた内容			
原文	読み取れた内容	要素	
此院由来人事少	世間と交渉のない静かな場所	閑静 休息	
況乎_水竹毎成_閑	タケ（池際）	植栽	
送_春薔棘珊瑚色	珊瑚色のノイバラの棘	植栽	
迎_夏巖苔玳瑁斑	夏を迎えたコケの様子	植栽	
避_景追_風長松下	マツの高木の下で納涼している	植栽 納涼	
提_琴搗_茗老梧間	①琴を提げる ②茶の芽を搗く ③アオギリの老木	弾琴 喫茶 植栽	

妙な時節が詠まれているが、これは①とも合致する。

淳和皇太弟は夏の閑院行幸に同行し、閑院が静かで世間との交渉が少なく、日々の疲れを癒す場所であることを詠んでいる。さらに、水辺に植栽されたタケの描写からも、閑院の静かで涼しげな雰囲気が読み取れる。これは、閑院が平安京の中心部に立地しながら、まるで世間と隔絶されたかのような空間を造り出していることを示している。植栽としては、マツの高木やアオギリの老木、ノイバラなどが登場するが、これは飛田が指摘する通りである。

また、この漢詩の第6句「提_レ琴搗_レ茗老梧間（琴を提げて茗を搗く老梧の間）」のなかに弹琴や茶に関する描写が見られる。蘇明は、第5・6句「避_レ景追_レ風長松下、提_レ琴搗_レ茗老梧間（景を避けて風を追う長松の下、琴を提げて茗を搗く老梧の間）」が、六朝の叙陵＜内園逐涼＞あるいは、梁の庾肩吾＜奉和太子納涼梧下應令詩＞に大変似ており、同じ構造の語を組み合わせる句を成り立たせていることを指摘した。しかし、叙陵＜内園逐涼＞なかの「酌酒勸梧桐」（酒）から「搗茗老梧間」（茶）への変化がみられることから、中国で唐代に初めて重視された

「喫茶」の風雅な趣を、嵯峨朝でこぞって取り入れたことは注目に値するとした¹⁹。嵯峨朝では中国の詩文が食欲に取り入れられ、かつ日本の文化風土に合わせた作品が創作されたのである。作品番号1に描かれた内容は、どこまでが修辭的な部分かという問題はあるが、「喫茶」が行われたことは確実であると考えられる。

(2) 作品番号2

「夏日左大將軍藤冬嗣閑居院」

嵯峨天皇

【原文】

避_レ暑時來閑院裏

池亭一把釣魚竿

廻塘柳翠夕陽暗

曲岸松声炎節寒

吟_レ詩不_レ厭_レ搗_レ香茗_一

乘_レ興偏宜_レ聽_レ雅彈_一

暫對_レ清泉滌_レ煩

況乎_二寂寞日成_一歎

【読み下し文】

あつけき 暑を避けて時に来る閑院の裏

池亭一たび把る 釣魚の竿

廻塘の柳翠夕陽に暗し

曲岸の松声炎節に寒し

詩を吟じ香茗を搗くこと厭はず

興に乘じ偏に雅弾を聴くこと宜し

暫し清泉に對ひて煩慮を滌ぐ

況むや寂寞なる日に歎を成すをや

【大意】

暑さを避けて、閑院には時々やってくる。池のほとりのあずまや辺りで魚釣りの竿を試みに一度手に取る。曲がりくねった池の堤の緑は夕日に暗く沈み、曲折した池の岸辺のマツを吹く風の音は、この炎天の時候でさえ寒そうに聞こえる。詩を吟じ、香りのよい茶の芽を搗くことを厭わない。興趣にそそられて、ひたすら琴の類を優雅に弾くのを聴くのはふさわしい。しばらくこの院の清らかな池泉に相對して日常の煩わしい思いを洗いすすぐ。まして静寂な状態にある今日のような日に、歡樂を尽くすことは猶更必要ないのである。

この作品の第1句「避_レ暑時來閑院裏（暑を避けて時に来る閑院の裏）」にあるように、夏に閑院を訪れると院内は涼しい。また第4句「曲岸松声炎節寒（曲岸の松声炎節に寒し）」では、入り組んだ岸辺に植わるマツに吹く風の音は、この炎天にあっても寒そうに聞こえると

表3 作品番号2に含まれる庭園に関する事柄

題目	夏日左大將軍藤冬嗣閑居院		
著者	嵯峨天皇		
時期	夏（弘仁5.4.28か）		
時間	日中		
漢詩に詠まれた内容			
原文	読み取れた内容	要素	
避暑時來閑院裏	避暑のために閑院を訪れた	避暑	
池亭一把釣魚竿	①釣殿 ②釣り	釣殿 釣り	
廻塘柳翠	ヤナギ（堤）	植栽	
曲岸松声	マツ（曲折した汀）	植栽	
吟詩不厭搗香茗	①詩を吟じる ②香りのよい茶の芽を搗く	詩会 喫茶	
乘興偏宜聽雅彈	風雅な琴の音を聴く	弾琴	
暫對清泉滌煩慮	日々の煩わしさをすすぐ場所	休息	

あり、作品番号1の5句に描かれた「避暑景追風長松下（景を避けて風を追ふ長松の下）」と同じマツであると考えられる。また、第2句「池亭一把釣魚竿（池亭一たび把る釣魚の竿）」では釣殿があり、そこから平安時代に釣竿として使われた竹條の類を垂らす様子が詠まれている。また、第5句「吟詩不厭搗香茗（詩を吟じて香茗を搗くこと厭はず）」では、作品番号1のように喫茶について言及されている。さらに、第6句「乘興偏宜聽雅彈（興に乗じて偏に雅弾を聴くこと宜し）」では「弾琴」に関する語もある。作品番号1の第6句「提琴搗茗老梧間（琴を提げて茗を搗く老梧の間）」では「提琴」があり、これは明らかに六朝詩からの引用であると思われるが、作品番号1、2両作品で同じく奏楽についての描写があり、一概に修辭的な引用と決めつけるべきではないと考えられる。植栽に関しては、池の堤のヤナギや入り組んだ池岸のマツなどが詠み込まれるだけである。一方で、閑院は清らかな水に恵まれ、池に臨んで釣殿も整えられていたことが読み取れる。池を利用した遊興である「釣」以外にも詩を吟じ、茶を喫し、優雅な琴の演奏を聴いている様が印象的である。つまり、作品番号2は閑院で行われた様々な遊興について描写された漢詩といえよう。第7、8句「暫對清泉滌煩慮、

況乎寂寞日成歎（暫し清泉に對ひて煩慮を滌ぐ、況むや寂寞なる日に歎を成すをや）」とあり、ここでは反語表現が用いられているが、閑院庭園には様々な「歎」を行う施設が整っており、天皇らにとって貴重な休息の場となっていたと考えられる。

(3) 作品番号3

「夏日倍幸左大將藤原冬嗣閑居院」、応製

從七位上守少内記滋野宿禰貞主

【原文】

寂然閑院當馳道

祇候仙輿灑一慮

酌茗菓室經行入

橫琴玳席倚岸居

松陰絶冷午時後

花氣猶薰風罷餘

水上青蘋莫赴浪

君王少選愛遊魚

【読み下し文】

寂然なる閑院馳道に當る

仙輿に祇候し一慮に灑ぐ

茗を酌む菓室經を行きて入る

琴を横たへし玳席岸に倚りて居る

松陰絶だ冷やかなり午時の後

花氣猶し薰る風罷みし餘

水上の青蘋浪に赴くことなかれ

君王少選遊魚を愛でたまふ

【大意】

もの静かな閑院の行幸路に当たり、謹んで御車に侍り閑院に向かつて水を注ぐがごとく直行する。晩茶を酌む菓室には庭の小路を通って入り、琴を横たえた立派な遊びの席は巖に寄り掛かって構えている。昼下がりで、庭園の松陰の辺りは非常に冷ややかであり、風が吹きやんだ後までも花の香はなおも芳しく香っている。池の水の上に漂う青い浮草よ、波のゆれるままにあちこち漂うことのないように、天子がしばらく浮草に戯れる魚を御覧になるのだから。

作品番号3の作者である滋野貞主（785～852）は、弘仁5年（814）頃、少内記に就いており、文筆に優れた官人であった。淳和朝では『経国集』の編纂に関わっている。『凌雲集』に彼の作品は2首しかないが、『文華秀麗集』には6首、『経国集』には14首が収録されている。作品番号3は、まず閑院行幸の道行きからはじまる。作者である滋野貞主は、天皇の御車に侍り、まっすぐ閑院へと向かっている。第3句「酌茗菓室經行入（茗を酌む菓室經行きて入る）」では、茶を酌む菓室には庭の小道を通っていく様子が詠まれる。庭の奥の方に、喫茶の

表4 作品番号3に含まれる庭園に関する事柄

題目	夏日倍幸 ² 左大将藤原冬嗣閑居院 ³ 、応製		
著者	従七位上守少内記滋野宿禰貞主（滋野貞主）		
時期	夏（弘仁 5.4.28 か）		
時間	日中		
漢詩に詠まれた内容			
原文	読み取れた内容	要素	
寂然閑院当 ¹ 馳道 ²	閑院へと至る静かな馳道	馳道	
酌 ³ 茗菓室経行入	庭の小道を通り、 晩茶を酌む菓室へ行く	小道 喫茶 菓室	
横 ⁴ 琴玳席倚 ⁵ 岸居	琴を演奏する宴席	奏楽	
松陰絶冷午時後	マツの木陰	植栽	
花気	花の芳香	植栽	
水上青蘋	水面の青い浮草	池	
遊魚	水に遊ぶ魚	池	

ための施設「藥室（茶を搗いて精製する場所）」があったことがうかがえる。第4句「横⁶琴⁷玳席⁸倚⁹岸¹⁰居（琴を横たへし玳席岸に倚りて居る）」では、管弦を奏する宴席は巖に寄りかかるように構えられているとあり、作品番号1、2と同じく、詩中には「弾琴」についての語が含まれている。第6句では「松陰絶冷午時後（松陰絶だ冷やかなり午時の後）」でマツの木陰について描写されているが、これも作品番号1、2でみられた。また、応製詩独特の表現もある。第7、8句に「水上青蘋莫¹¹赴¹²浪、君王少選愛¹³遊魚¹⁴（水上の青蘋浪に赴くこと莫かれ、君王少選遊魚を愛でたまふ）」とあるが、臣下を遊魚に例え、魚を優しく眺める天皇に臣下らへの恩恵の深さを重ねているのである。つまり、応製詩の尾聯として詠まれているのは、庭園の風景についてではない。しかし、ここで描写されている池は、青く揺らめく水草とそこに泳ぐ魚の様子が見えるほどで、閑院の池が清く澄んでいた様子が示唆されている。

作品番号1～3は同じ行幸の際に詠まれたものなので、ここで3首に共通して表されている特徴を見ておきたい。まず、閑院の静かで世間と隔離されたかのような清浄さがある。「此院由来人事少（此の院由来人事少らなり）」（作品番号1）、「暫対¹⁵清泉¹⁶滌¹⁷煩慮¹⁸（暫し清泉に対し

て煩慮を滌ぐ）」（同）や「避暑時来閑院裏（暑を避けて時に来たる閑院の裏）」（作品番号2）がそれに当たる。二点目が、夏の涼しさであり、「曲岸松声炎節寒（曲岸の松声炎節に寒し）」（作品番号2）のようなマツのある風景で表わされている。作品番号1、3にもマツの記述がある。マツは厳しい暑さのなかでも常に青々と葉が茂り、涼しさを求める人々に木陰を提供する存在だったと考えられる。三点目は、喫茶である。「提¹⁹琴²⁰搗²¹茗²²老梧間（琴を提げて茗を搗く老梧の間）」（作品番号1）、「吟²³詩不²⁴厭²⁵搗²⁶香茗²⁷（詩を吟じ香茗を搗くこと厭はず）」（作品番号2）、「酌²⁸茗²⁹藥室³⁰經行入（茗を酌む藥室を経行きて入る）」（作品番号3）とあり、共通して「茗」という語が登場している。ここから、行幸の際に「喫茶」が行われたことがわかる。さらに、「藥室」とあるように喫茶のための施設も備えられていた。四点目は、弾琴である。「横⁶琴⁷玳席⁸倚⁹岸¹⁰居（琴を横たへし玳席岸に倚りて居る）」（作品番号3）など、弾琴に関する語が3つの詩に共通して詠み込まれていることである。村井は、茶が音楽とともに幽興の世界をかもし出し、詩趣をもり上げる不可欠の要素であったことを指摘しているが、これは十分に説得力のある主張である²⁰。

その他、3詩に共通してはいないが、重要だと考えられる部分について述べておこう。まず、池に関する語について着目したい。「況乎³¹水竹每成閑（況むや水竹毎に閑を成すをや）」（作品番号1）では、池岸に沿ってタケが植栽されており、閑静な様子が詠まれている。さらに、「池亭一把釣魚竿（池亭一たび把る釣魚の竿）」（作品番号2）では「池亭」いわゆる釣殿において、釣を楽しんでいる様子が描かれている。作品番号3では「水上青蘋莫¹¹赴¹²浪、君王少選愛¹³遊魚¹⁴（水上の青蘋浪に赴くこと莫かれ、君王少選遊魚を愛でたまふ）」とあり、作品番号2と合わせてみても、池中には水草が茂り、魚が放たれていたことがうかがえる。植栽については堤にヤナギが植栽され、アオギリの古木が描写されるが、蘇が述べるように六朝にこれと酷似した詩文があり、そこでもアオギリが詠まれていることから、アオギリそのものが存在したかどうかは疑わしい。また「送³²春薔棘珊瑚色（春を送る薔棘珊瑚の色）」（作品番号1）とあり、ノイバラが植栽されている。飛田は平安時代前期の貴族住宅において、建物近くにナシやノイバラが植栽されて

いたことを指摘している²¹。

以上のうち、3つの漢詩で共通して表われた特徴は、閑院の庭園の要素として非常に信憑性の高いものだと考えられる。植栽については、青々としたマツの存在は確かであろうし、池亭や薬室などの諸施設に関しても同様である。この3首には、「釣」や「喫茶」、「弹琴」などの遊興に関する数々の出来事が描写されている。この行幸は藤原冬嗣の叙任に際する「密宴」であるが、太田は平安時代初期の早い時点で貴族の住宅が行幸に利用されることは異例だけに、それだけ充実した邸宅であったことを推測している²²。おそらく、接遇の面からみても、様々な施設が充実していたことは十分に考えられる。

(4) 作品番号4

「敬^{ミテ}和^ス下^下左神策大將軍春日閑院^{ニシテ}餞^ス美州藤大守甲州藤判官^ヲ之作^ニ上^上。一首。」 巨勢識人

【原文】	【読み下し文】
杜鵑啼序春將 ^レ 闌	とけんていじょ た 杜鵑啼序春將に闌けむとし
閑院花亭餞 ^ニ 両官 ^ヲ	閑院花亭両官を ^{はなむけ} 餞す
飛鳥始乗 ^ニ 鳥翼 ^ヲ 去	ひせき 飛鳥始めて鳥翼に乗りて去り
離絃頻送 ^ニ 鶴声 ^ヲ 彈	しき 離絃頻りに鶴声を送りて弾く
郷心遠樹孤雲跡	郷心の遠樹孤雲の跡
客路辺山片月寒	客路の辺山片月寒し
一別情期勿 ^レ 慙忘	こころ ちぎ しばら 一別情に期る慙くも忘ること勿れと
音書屢寄往来看	しばしば 音書 屢 寄せよ往來を看む

【大意】

ホトトギスの鳴く頃がやってきて、春も盛りを過ぎようとしている。閑院の花を愛でるあずまやで二人の官人の送別を行う。王喬は初めて履物を残したまま鳥の翼に乗って天上に去ったが、二君も初めて役人となって任国に行く。別れを惜しんで弾く絃は、ツルに乗って飛び立つ仙人、つまり二官を見送ってしきりに演奏される。故郷の遠い彼方の木々を見やると一片の雲の跡が見られ、旅路の辺地にある山には弦月が寒くかかる。一たび別れても、忘れることがないようにと誓う。便りをしばしば寄せなさい、お互いに便りを交わそう。

表5 作品番号4に含まれる庭園に関する事柄

題目	敬和 _下 左神策大將軍春日閑院餞 _ニ 美州藤大守甲州藤判官 _ヲ 之作 _上 。一首。		
著者	巨勢識人		
時期	春（弘仁4年か）		
時間	不明（日中か）		
漢詩に詠まれた内容			
原文	読み取れた内容	要素	
閑院花亭餞 _ニ 両官 _ヲ	閑院の花が咲く亭で二人の官吏を餞別する	花亭 餞別	
離絃頻送 _ニ 鶴声 _ヲ 彈	別れを惜しんで弾く琴の音	弹琴	

作品番号4は、巨勢識人の作である。巨勢識人は、三大漢詩文集すべてに作品が収録されている平安時代初期の漢詩人である。この漢詩は、春日に美濃の判官である藤原吉野と甲斐の判官である藤原某に藤原冬嗣が送った餞別の作品に、巨勢識人が唱和したものである。記録が残っていないため詳細を知ることとは出来ないが、藤原吉野が、弘仁4年（813）に美濃少掾となることから、弘仁4年春、送別の宴において詠まれた作品であると推測できる。この漢詩は、閑院の庭園についての描写が非常に少ないが、第2句「閑院花亭餞^ニ両官^ヲ（閑院花亭両官を餞す）」では「花亭」と詠まれており、咲き乱れる花を愛でる亭で宴を催した様子が分かる。第3句「離絃頻送^ニ鶴声^ヲ彈（離絃頻りに鶴声を送りて弾く）」では、二官の別れを惜しんで、しきりに別れの琴が演奏される場面が詠まれている。

(5) 作品番号5

「餞^ス美州掾藤吉野^ヲ。得^{タリ}花字^ヲ。一首。」

淳和皇太弟

【原文】	【読み下し文】
今宵儻忽言離別	たちまち こゝろ 今宵儻忽に言に離別す
不 ^レ 慮分飛似 ^ニ 落花 ^ヲ	はか 慮らずありき分れて飛んで落花に似るとは
莫 ^レ 怨白雲千里遠	怨むこと莫れ白雲千里の遠きを
男兒何処是非 ^ノ 家	男兒何れの処ろにか是れ家にあらぬ

【大意】

今宵ゆくりなくもここに君と離別する。お互いに別れ飛んで、あたかも飛び散る落花のようになろうとは思いがけないことである。君と私との間には、白雲が千里に渡って立ち込めていて遠く離れているが、それを恨んではならない。男子たる者は何処にいても住むべき家があるのだ。

これは『文華秀麗集（餞別）』に収録されており、作品番号4と同じ宴の場で詠まれた漢詩である。藤原冬嗣、淳和皇太弟、巨勢識人らが集まり、藤原吉野らの送別の宴を開いたのである。残念ながら、閑院の庭園意匠の詳細についての描写はないが、第2句「不_レ慮分飛似_二落花_一」（慮らずありき分れて飛びて落花に似るとは）」とある。これは、淳和皇太弟らと藤原吉野ら二官の突然の別れが落花に例えられているのであり、落花自体を詠んでいるのではない。しかし、春の閑院において詠まれたこの詩では、題字として「花」が用いられており、題字として用いるほどに、春の閑院は花が有名だったと考えるのが自然であろう。作品番号4の第2句「閑院花亭餞_二両官_一」（閑院花亭両官を餞す）」と合わせ考えると、春の閑院には花々が咲き乱れていた様子がうかがえる。また、唐詩では別れの悲しみ、あるいは女性の涙などを表現するときにはナシの花が散る様子が詠われる。中唐の詩人である白居易（772～846）の＜長恨歌＞にもナシが登場する。日本では平安時代の僧・恵萼によって『白詩文集』が伝来し、平安時代の漢文学に大きな影響を与えた。平安時代中期の『枕草子』でも『白詩文集』を称賛する部分がある。＜長恨歌＞では、ナシの花は次のように詠われる²³。

「…玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶_レ雨…（玉容寂寞として涙闌干たり、梨花一枝春雨を帶ぶ）」

（大意：玉のように美しい顔は寂しげで涙がこぼれる。）

表6 作品番号5に含まれる庭園に関する事柄

題目	餞 _二 美州掾藤吉野 _一 得 _二 花字 _一 一首		
著者	淳和皇太弟		
時期	春（弘仁4年か）		
時間	不明（日中か）		
漢詩に詠まれた内容			
原文	読み取れた内容		要素
不 _レ 慮分飛似 _二 落花 _一	散り落ちる花々（ナシの花か）		植栽

一枝のナシの花が雨に濡れたような風情である。）

作品番号5、6が詠まれた季節は春で、まさにナシの花が満開になる時期である。仲隆裕は、『枕草子』で間近で観賞するには魅力がない花だと評されるように、平安時代の日本の感覚ではナシは鑑賞の対象となる花ではなかったものの、一方で中国のナシの文学的イメージを受容し、かつその感覚にまで近付こうとしていた平安人の意識を指摘している²⁴。また、飛田は建物の近くにはナシやノイバラが植栽されたとする。つまり、ナシは文学的イメージと共に日本に受容され、中国的感覚のままに庭園に植栽されたと考えられる。閑院の亭の周辺にもナシが植栽され、春にもなればナシの花が咲き乱れ、餞別の宴をするには相応しい舞台となったとも考えられる。

(6) 作品番号6

「五言遥和_二播州長史丹治中得_レ絮柳_一請_二植_レ左大將軍閑院_一之作_二上_一」

滋野貞主

【原文】

【読み下し文】

柳条八許尺	はちきよせき 柳条八許尺
截取寄 _二 情人 _一	せつしゅ 截取して情人に寄す
根断葉樵卷	や 根断ち葉樵けて巻く
紛空絮落頻	紛空しく絮落ちて頻る
星躔移 _二 夕建 _一	せいてんせきけん 星躔夕建に移る
龍路送 _二 朝鱗 _一	龍路朝鱗に送る
挿 _二 地日猶淺 _一	つち 地に挿す日猶し浅し
須 _レ 看後歳春	須く看るべし後歳の春

【大意】

ヤナギの枝は八尺ばかり、伐って左大將軍の君に贈る。根は断たれ、焼け枯れた葉裏が逆さまに巻き、白い絮がむなしく散りしきっている。北斗星の宿りは夕方の方へ傾き、青龍星の進路は朝の方へ向かう。土に移し植えてからまだ日は浅いが、来年の春を必ず御覧あれ。

作品番号6は、多治比清貞²⁵（播磨の少掾）の漢詩に唱和した滋野貞主による作品である。なお、元となった漢詩は残っていない。これは、多治比清貞が藤原冬嗣にヤナギを贈り、それを閑院に移植した時のもので、記録

表7 作品番号6に含まれる庭園に関する事柄

題目	五言遥和 _下 播州長史丹治中得 _上 絮柳請 _下 植 _上 左大將軍閑院 _上 之作 _上		
著者	滋野貞主		
時期	柳絮から春か		
時間	日中か		
漢詩に詠まれた内容			
原文	読み取れた内容		要素
柳条八許尺	八尺くらいのヤナギの枝		植栽
根断葉焦卷	根を断たれ葉がしおれて巻いている		植栽
紛空絮落頻	柳絮がしきりに落ちる		植栽
挿 _下 地日猶浅	まだ移植して日が浅い		植栽

が残らず詳細は不明である。ヤナギの根は移植するにあたって断ち切られ、枝は8尺ほど(約2.4メートル)で、葉はしおれて巻いており、しきりに柳絮が舞っている。柳絮が飛ぶのは春なので、移植された時期や漢詩が作られた時期も、春であると考えられる。尾聯には、ヤナギは移植して日が浅いために弱々しいが、来年の春には生き生きと新芽を出すだろうと結ばれている。例えば、閑院の他の作品でヤナギが登場したのは作品番号2の3句「廻塘柳翠夕陽暗(廻塘の柳翠夕陽に暗し)」で、池の堤のヤナギが詠まれている。作品番号6からは、庭園のどこにヤナギを植栽したかについて判断できないが、飛田は園池の岸にはシダレヤナギやマツ、園路に沿ってシダレヤナギやタケが植栽されていたと指摘する²⁶。

5 考察

これまでに示してきた閑院の漢詩は、「3(2) 閑院の記録」でも述べたように、「密宴」や私的な宴などで詠まれたものである。作品番号1~3は、主人である藤原冬嗣などの叙任に際した行幸、作品番号4、5は藤原吉野、藤原某を送別するための餞別の宴、作品番号6は閑院でのヤナギの移植というように、それらが詠まれた場面は多様である。

場面のそうした多様さの中であって、閑院に関する漢詩の特徴としては、1つ目に庭園内部の植栽や施設について比較的多くの情報が含まれている点、2つ目に庭園内で行われた遊興等に関する事柄が多く詠み込まれてい

る点が挙げられる。

まず1つ目の特徴である「庭園内部の植栽や施設」について確認しておきたい。庭園内部の植栽については、作品番号1~3にマツの高木が登場する。このマツは3つの漢詩に詠まれていることから、その存在の信憑性は高いと考えられる。マツの高木は屈曲する池の岸辺に植栽されており、常に葉は青々としていたので、暑い夏の日には池岸の木陰で人々は涼風を得ていたものと考えられる。他にタケ、ヤナギ、アオギリ、ノイバラも登場する。アオギリの古木の下では茶の芽を搗く様子が詠まれるが、アオギリは六朝詩の引用であるとの指摘もあり、他の樹種の木をアオギリと呼んだ修辭的な表現である可能性もぬぐい切れない。ヤナギについては、作品番号6に閑院でのヤナギの移植について詠まれているので、閑院にヤナギが植栽されていたことは確実であろう。さらに、作品番号4・5で詠まれる亭を彩る「花」は、季節や情景からナシの花である可能性が高い。特に、散りゆく様を詠むのは、唐詩でのナシの用法にも合致する。このことから、閑院の亭のそばにはナシが植栽されていたことが推測できる。

庭園内に点在するいくつかの施設についても漢詩から知ることができる。作品番号2の第2句に「池亭」という語があり、作品番号3の尾聯の表現「水上青蘋莫_下赴_上浪、君王少選愛_下遊魚_上」(水上の青蘋浪に赴くこと莫かれ、君王少選遊魚を愛でたまう)」とも合わせ、閑院には釣殿があったことがわかる。また、作品番号4、5の舞台となったのが、2人の官人を餞別する宴が催された「花亭」という建物である。さらに、「酌_下茗菓室徑行入(茗を酌む菓室徑を行きて入)」(作品番号3)とあるように、庭内の小道を入ったところには「菓室」が設えられていた。蘇は、「菓室」の「菓」という語が中国的神仙思想と関わるもので、中国では文人らが道家的隱遁志向を表わす時に、その語を詩に詠み込んだことから、同じく平安貴族の喫茶も神仙思想と関わりがあったことを推測している。また、仲はアオギリの下で菓たる茶を飲むことは、神仙の境地へ達しようとする行為であったと推測した²⁷。つまり、小川も述べるように、喫茶自体が隱棲的・脱俗的雰囲気をもつ特別な行為であることから²⁸、それを行うための設えという意味で、「菓室」と表現されたと考えられる。

表8 遊興等に関して詠まれた部分一覧

遊興に関する部分	遊興等の種類		作品番号
提 _レ 琴 _レ 搗 _レ 茗老 _レ 梧間	提琴 搗茗	彈琴 喫茶	1
池亭一把釣魚竿	池亭 釣魚竿	釣り	2
吟 _レ 詩不 _レ 厭 _レ 搗 _レ 香茗 _レ	吟詩 不厭搗香茗	賦詩 喫茶	2
乘 _レ 興偏 _レ 宜 _レ 聴 _レ 雅 _レ 彈 _レ	聴雅彈	彈琴	2
酌 _レ 茗菓室經行入	酌茗菓室	喫茶	3
横 _レ 琴 _レ 玳 _レ 席倚 _レ 岸居	横琴玳席	彈琴	3
水上青蘋莫 _レ 赴 _レ 浪 _レ 君王少選愛 _レ 遊魚 _レ	水上青蘋 遊魚	観魚	3
閑院花亭餞 _レ 兩官 _レ	閑院花亭	宴	4
離絃頻送 _レ 鶴声 _レ 彈	離絃	彈琴	4

次に、2 つ目の特徴である「遊興等に関する事柄」について見ておきたい。登場する遊興としては、「釣り」、「弾琴」、「喫茶」、「詩歌」がある（表 8）。特に、「弾琴」は作品番号 1～3 の一連の漢詩だけではなく、「離絃頻送_レ鶴声_レ彈（離絃頻りに鶴声を送りて弾く）」（作品番号 4）とあり、餞別の宴での情景としても詠まれている。また、「喫茶」に関して、仲は作品番号 1～3 の漢詩が詠まれた季節は新茶の時期とも合致するので、庭園の中で餅茶を作り、さらにそれを煮出して飲むまでの一連の過程を楽しんだのではないかと指摘した²⁹。また、小川は「茗を搗く」という表現は団茶の粉末をかき混ぜることの表現であり、茗とは団茶の粉末ではないかと指摘している³⁰。つまり、閑院庭園で行われた喫茶は、天皇は臣下と共に、餅茶（団茶）³¹を搗きほぐして粉にし、菓室で煮出し、味わうといった一連の過程を行い、その合間に詩作や弾琴に興じながら、ゆったりとした時間を心ゆくまで楽しむものであったことがわかる。

このように、閑院の庭園を詠んだ漢詩は全部で 6 首であるが、その中には表 8 に示すように「遊興」等に関する事柄が多く表現されている。これは、他の邸宅の漢詩と比べても際立った特徴である。閑院は、臣下の邸宅でありながら行幸があり、天皇の離宮などに匹敵するほど

の漢詩が残されている。これは太田が指摘するように閑院が平安時代初期の臣下の邸宅のなかで一步抜きんできた存在であったことを示している。

漢詩を材料として閑院の庭園の形態と機能を探った本稿では、閑院が嵯峨朝の邸宅のなかでも、各種遊興に対応する設備が充実し、なおかつ、実際にそれらが遊興の場として用いられたことを明らかにした。特に、藤原冬嗣は臣下という立場であったが故に「接遇」という側面が非常に意識され、それが遊興に対応する施設の充実につながったのではないかと推測できる。また、このような庭園を備えた閑院への行幸は、邸宅の主人である冬嗣やその家人に対する叙任など、より私的な色合いが強いものであり、そこでの宴は天皇が臣下との関係をより親密にするための場である「密宴」的な色合いの濃いものであったと考えられる。

補注

1 太田静六 1987 『寝殿造の研究』 吉川弘文館 pp.530-560

2 野口孝子 2004.7 『日本歴史』 674 「閑院内裏の研究」 pp.1-16

3 飛田範夫 2002.12 『日本庭園の植栽史』 京都大学学術出版会 pp.63-64

4 蘇明明 2003.3 「唐の文人喫茶と平安王朝の喫茶趣味—唐の茶詩と平安漢詩に見える喫茶を通じて」 『日本文化環境論講座』 第5号 京都大学大学院人間・環境学研究科日本文化環境論講座

5 ①村井康彦 1969.7 『茶の湯の歴史』 淡交社 pp.40-64 / ②村井康彦 1979.6 『茶の文化史』 岩波書店 pp.11-16

6 小川後楽 1980.3 『茶の文化史—喫茶趣味の流れ』 (株) 文一総合出版 pp.73-129

7 太田は次の史料を例に挙げている。

『二中歴』「閑院《二条南、西洞院西、冬嗣大臣家、又右大将朝光家、金岡量水石云云、公季卿伝領、本主備後守至忠、》」

8 太田は、以下の記録から第 2 期閑院の庭園について推察した。

『中右記』嘉保2年（1095）11月庚午（7日）条

「主上釣殿に御す。予、箏を弾く。余興未だ尽きず。仰に依りて船に乗る。予、笙を吹く。蔵人宗仲笛を吹く。左馬頭師隆朝臣竜舟に棹さす。鳳池・中島を廻る。一廻の間に蘇合急七遍を吹く。又一廻、秋風

楽を二遍、」

9 飯淵康一 2005.2.28 『平安時代貴族邸宅の研究』中央公論美術出版

10 脚注2と同じ。

第1期【仁安二年（1167）～承元二年（1208）焼亡】

第2期【順徳朝～後深草朝（建長元年（1249））焼亡】

第3期【後深草朝～正元元年（1259）】

11 『拾芥抄（中）』「閑院《二条南、西洞院西一町、冬嗣大臣家、金岡豊「水」石、公季公伝領云云、》」

12 弘仁5年4月乙巳（28日）条「乙巳。幸_二左近衛大將正四位下藤原朝臣冬嗣閑院_一。供張之宜、甚有_二雅致_一。天皇染_レ翰、群臣獻_レ詩。時人以爲_二嘉會_一。授_二冬嗣從三位、无位藤原美都子從五位下_一賜_二五位以上衣被_一。」

13 『日本後紀』：黒板勝美（編）1971.4 『新訂増補国史大系 日本後紀』吉川弘文館

※以下『日本後紀』を参考とする記事は、同書から引用する。

14 『日本後紀』弘仁12年9月乙亥（6日）条「乙亥。幸_二右大臣閑院_一。命_二文人_一賦_レ詩。」

15 滝川幸司 2007.2 『天皇と文壇—平安前期の公的文学』和泉書院 pp.7-28

16 脚注15に同じ。滝川は『朝野群載』（巻13、書詩体、帝王）から「公宴の時、必ず待宴の字を書く也。臨時の密宴之れを書かず」を根拠に、公宴と密宴を分けた。

17 鈴木景二 1989.12 「日本古代の行幸」『ヒストリア』125 大阪歴史学会 pp.26-55

18 漢詩の読み下し文、及び大意（解釈）については以下の文献を典拠とする。

1、『凌雲集』：小島憲之 1979.1 『国風暗黒時代の文学』中（中）塙書房

2、『文華秀麗集』：小島憲之（校注）1964.6 『日本古典文学大系10』岩波書店

3、『経国集』：小島憲之 1998.10 『国風暗黒時代の文学』下（3）塙書房

※なお、作品番号1～3については、脚注6（小川後楽、『茶の文化史—喫茶趣味の流れ』）をも参考にした。

19 脚注4に同じ。pp.58-59を参考にした。

20 村井康彦 1979.6 『茶の文化史』岩波書店 pp.14-16

21 脚注3に同じ。p.59を参考にした。

22 脚注1に同じ。

23 川合康三（訳）2011.7 『白楽天詩選（上）』岩波文庫

24 仲隆裕 2007.5 「庭園史からみた王朝文学—寝殿造庭園における植栽」『平安文学と隣接諸学 1 王朝文学と建築・庭園』竹林舎

25 小島憲之 1998.10 『国風暗黒時代の文学』下（3）塙書房 P.4142

26 脚注3に同じ。

27 仲隆裕 2010.1 「茶の湯と庭園 第1回嵯峨天皇と喫茶の宴」『茶道雑誌』 pp.119-128

28 脚注6に同じ。

29 脚注27に同じ。

30 小川後楽 1980.3 『茶の文化史—喫茶趣味の流れ』（株）文一総合出版 p.91

31 団茶とは、茶葉を蒸して、臼でつき乾燥させ、煉瓦状・タイル状・円盤状等に押し固めたもので、唐代（7世紀以前）の餅茶の系譜を引くものである。平安時代初期の飲まれた茶も、餅茶や団茶と呼ばれるような固形茶であった。（参考：①布目潮風 2007『中国喫茶文化史』岩波書店 1995／②『世界大百科事典』平凡社）

参考・引用文献

1) 太田静六 1987.2 『寝殿造の研究』吉川弘文館

2) 小島憲之 1979.1 『国風暗黒時代の文学』中（中）塙書房

3) 小島憲之 1998.10 『国風暗黒時代の文学』下（3）塙書房

4) 小島憲之（校注）1964.6 『日本古典文学大系 10』岩波書店

5) 飛田範夫 2002.12 『日本庭園の植栽史』京都大学学術出版会

6) 倉田実（編）2007.5 『平安文学と隣接諸学 王朝文学と建築・庭園』竹林舎

7) 滝川幸司 2007.2 『天皇と文壇—平安前期の公的文学』和泉書院